カセサート大学　11 月マンスリーレポート

氏名：松井瑞嬉
所属：獣医学類 5 年
学籍番号：22161103

11 月は Pathology unit, Equine unit を 1 週間ずつカンペンセンキャンパスで学んだあと、ホアヒンへ移動し教育動物病院にて小動物医療を学びました。11 月の 1 か月で感じたこと、今回の留学を通して感じたこと・学んだことを報告いたします。

〇疑問点を誰かと共有し共に調べ、質問することの重要性を感じた。

全ての授業や実習が英語で行われるプログラムですので、私は英語が聞き取れなかったり単語の意味がわからなかったり、1 回で理解しきれない場面が多々ありました。そんな時に一緒に留学に来ている友人に疑問を共有し、一緒に調べ、それでもわからない場合は先生に聞くということをすると、疑問点が解消され理解がすごく深まる機会が多くありました。質問する側も質問された側も気づくことがあり、疑問点の共有というのはメリットしかないと改めて感じました。毎度できることではありませんが、気を使いながらも自分が疑問だな、不思議だなと思ったことについては積極的に人と共有し一緒に考えていく機会を今後も作っていきたいと思いました。何より、自分はこの過程がとても楽しいと気づくことができました。

〇獣医学は無限大の可能性があると感じました

私の今回の留学の目的の 1 つに今まで学んできた日本の獣医学を客観的に見ることにより、日本における獣医学の可能性を考えるということがありました。獣医学に無限大の可能性があると感じたのは、獣医学の利用の仕方は最終的にはその獣医師によると感じたからです。当たり前ですが、国や地域が変われば必要となる獣医学は異なります。タイでは養豚のマネジメントや養殖のマネジメント、血液感染寄生虫の治療など日本では学べないことを学ぶことができました。それは、それらがタイの獣医学で重要な分野となっているからです。

獣医学として不変な部分がまずあり、国や地域によって求められる獣医学は異なり、最終的にその土地で獣医学をどう利用するかはその獣医師次第であると感じました。獣医師によってその考え方は無限大です。従って、獣医学は無限大の可能性があると今は感じます。獣医学を利用する引き出しを増やすために常に視野を広く持ち、積極的に海外で獣医学を学んでいく必要があると感じました。

〇教えたいという気持ち、教わりたいという気持ちは相関する

この留学期間で様々なユニットを周る中で、本当に多くの先生に出会いました。日本人の友人とも、このユニットは〜だった、この先生は〜だった、このユニットはここが〜で良かった。とユニットや先生の比較をする場面が時々ありました。先生毎に学生に対して教える態度に差が全くないと言えば嘘にはなります。多くのことを教えたいという気持ちや熱意がとても伝わる先生もいれば、それがあまり伝わらない先生もいました。忙しい中でも時間をとって学生に多くのことを教えてくれる先生がいる時は、私も学びたいという気持ちがより大きくより楽しく学ぶことが出来ました。教育者の態度というのは、学生の学習意欲に大きく影響を与えるのだなと感じました。私も卒業後、もし学生に何かを教える立場になった時は熱意を持ち、楽しそうに物事を伝えられるような人になりたいと感じました。そうすれば、教わった学生側も楽しく感じてくれるし、自分の話に興味を持ってくれるのではないかと感じました。

今回の留学を通じて今後も海外で学ぶ機会を大切にしたいという気持ちがより高まりました。卒業後も海外で学ぶことを大切にし、視野を広く持ち、獣医学を利用して社会へ貢献できるような人になりたいと思います。

最後になりますが、この 2 か月半は多くの人からの優しさにより充実した留学ができたと感じます。時々参加学生同士のいざこざがあると聞いていましたが、今回はそのようなことはなく、楽しい思い出に溢れた日々を過ごすことが出来ました。他人の優しさに触れることで、自分の言動を振り返る良い機会になりました。

【バンケンキャンパス内のスキルスラボ棟】
カセサート大学では、酪農学園大学のように動物の模型を使った実習を行うための部屋がありました。実習に動物の生体を使用する数を減らすという流れは世界中であるのだなと実感しました。

【磁気治療をやらせてもらっている写真】
磁気によって筋肉を刺激し振動させることによって痛みを緩和し、血流量を増やす療法です。この日は 1 日で 3 件の磁気治療を見学する機会がありました。ヒト医療で使用していた機械を使用しているためコストが抑えられ、治療費も抑えられているそうです。

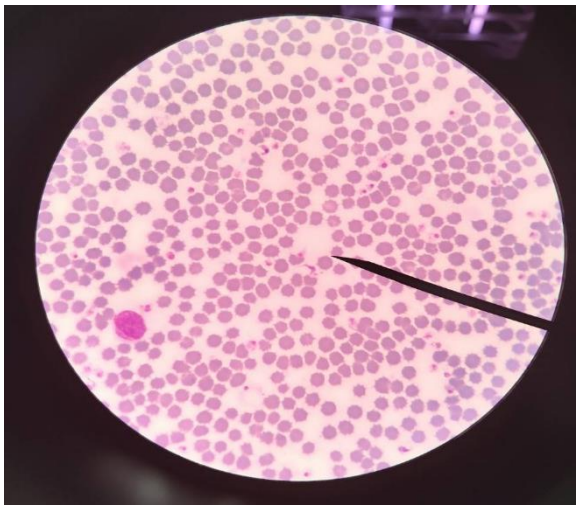
【Cicada Market】
タイのマーケットで一番好きだったマーケットです。ホアヒンにあります。様々なアート作品や手作り雑貨があり、友人や自分へのお土産をたくさん買うことが出来ました。色々な場所でイベントごともあり、散策するだけでもとても楽しかったです。写真の日は観光客で溢れかえっていました。タイといっても場所によってマーケットが全く違うのもタイの楽しみの 1 つです。

【ホアヒンのビーチで見た朝日】
ホアヒンの宿から自転車で 15 分はしるとビーチに行くことが出来ます。みんなで朝早く出発し、綺麗な朝日を見ることが出来ました。北海道やカンペンセンではこんな距離に海がなかったので、時間がある限りみんなで海に遊びに行きました。ホアヒンはとても空が広く感じ、観光地なので暮らしやすく、とても大好きな場所でした。また遊びに行きたいです。

【銃で撃たれた野良犬の手術】
　下顎が割れてしまった犬の手術を見学しました。どうなったそうなってしまうの？？と思うような傷でした。友人が病歴を聞くと銃で撃たれたと教えてくれました。カンペンセンキャンパスの大動物ユニットで学んでいた時も、1 件銃で撃たれた牛が搬入されてきました。
タイでは日本ほど銃の規制が厳しくなく、野良犬の数も多いため時たま銃で撃たれる症例が来るようです。この犬は手術が終わるとそのまま野外に戻すと言っていました。タイでは完全なる野良犬と少し人の手が加えられている野良犬の区別があるらしく、この犬は後者なのかなと思いました。今も元気で過ごしていて欲しいです。

【エバンス・トリパノソーマの症例】
馬ユニットでは、トリパノソーマ症例を見ることが出来ました。この原虫は牛では感染しても無症状で牛が保虫宿主となります。
タイでは馬と牛を同じ土地で飼育してしまう農家さんが多く、それが馬での感染を引き起こしている要因になっているそうです。
マネジメントの重要性を感じました。

【馬の経鼻胃投与】
酪農学園大学のスキルスラボで習ったことを実際の馬で実践することになるとは思っていなかったので、とても緊張感を持ち慎重にチューブを奥に押したことを覚えています。
模型で学ぶことは大事ですが、生体でしか感じられない緊張感というのがあるなと実感しました。自分が必要性を感じた時は、大学の外に出て生体で学べる環境に身を置くことが大事だと思いました。



【Pathology unit でみた血液塗抹】
このユニットでは初めに牛の血液塗抹を観察し、感染している血液感染寄生虫を形態で予想し、その後 PCR 検査で同定するということを 1 週間で行いました。血液感染寄生虫の形態と血液検査結果から予測する過程はとても楽しかったです。
自分は臨床よりラボワークの方が好きだなと改めて感じられたユニットでした。